

世界市場と世界経済体制

小 椋 広 勝

一 ま え が き

私は最近世界市場と世界経済体制という二つのカテゴリーを中心にして戦後の世界経済の動向を理解しようとしてこころみている。そのこころみの一部は「戦後の世界経済」という小著の形で発表したが、この小著では世界市場と世界経済体制の二つのカテゴリーそのものの意義をほり下げて論じることができなかった。元来この二つの概念は私の創作ではない。マルクス経済学の世界経済の理論ですでにひろくもちいられているものである。たとえばドイツ民主共和国のグンター・コールマイはその著作でこれに中心的な地位をあたえている。⁽²⁾しかしそれほどわれわれになじみ深い概念であるにもかかわらず、その内容についてあまり掘り下げはおこなわれていない。その内容が人々によって任意に規定されているくらいがある。周知のとおりスターリンの「ソ連における社会主義の経済的諸問題」では、単一世界市場の崩壊、二つの平行する世界市場の成立が資本主義の全般的危機の第二段階を画する変化だとされている。⁽³⁾この単一世界市場の崩壊という規定はソ連科学アカデミーの経済学教科書第一版によって採用されたが、第三版以後ではとりのぞかれている。⁽⁴⁾しかし世界市場と世界経済体制の概念につ

てはあきらかな規定があたえられておらず、不十分なものを感じさせられる。二つの世界市場という考え方にたいては、木下悦二氏は疑問を提起し、世界市場について明確な規定をあたえようところみている。⁽⁵⁾木下氏は単一世界市場の崩壊を否定する結論に達し、これにたいしては松井清氏の反論がある。⁽⁶⁾私もこの問題に後段でふれるだろう。ただ木下氏が世界市場そのものの本質をあきらかにして、二つの世界市場をめぐる疑点を解決されようとした接近のころみは評価されてよい。私もそれにならって世界市場と世界経済体制とはなにかという問題にとりくむことにしたい。

(1) 小椋広勝「戦後の世界経済」一九六〇年 三一書房。

(2) Gunther Kohlmeier, Der demokratische Weltmarkt. Berlin 1956. 邦訳、松井清、吉信爾「社会主義世界市場」一九五七年日本評論新社 Derselbe, Entwicklungsprobleme des sozialistischen Weltwirtschaftssystems. Berlin 1958.

(3) スターリン「ソ同盟における社会主義の経済的諸問題」飯田貫一訳、国民文庫、三九頁。

(4) 「経済学教科書」第一版は次のようにのべている。「第二次大戦がおこり、世界に二つの陣営が形成されたため、そのもっとも重要な経済上の結果として、全体をとらえる単一の世界市場が崩壊した。その結果、『対立した二つの陣営が存在することの経済上の結果は全体をとらえる単一世界市場が崩壊して、その結果、いまでは、これまたがいに対立する二つの平行した世界市場があるということである。』(スターリン上掲) このことが基礎となつて、資本主義の全般的危機はいっそうふかまった。(マルクス・レーニン主義普及会訳、合同出版社、第二分冊、第一版一九五五年、四七三頁) 第三版では、この一節は削除されている。これにあたる資本主義の全般的危機の第二段階の特徴は次のように説明されている。「資本主義の全般的危機の第二段階のもっとも主要な特徴は、(一)ヨーロッパとアジアのいくたの国が資本主義体制から離脱し、社会主義世界経済体制が形成されたこと、(二)帝国主義の植民地体制の危機がいちじるしくはげしくなり、この体制の崩壊がおこっていることである。」(経済学教科書刊行会訳、合同出版社、第二分冊、改訂第三版一九六〇年、四一九頁) すなわち第三版では単一世界市場の崩壊ではなくて、社会主義世界経済体制の成立ということが第二段階の特徴とされているのである。ただ二つの世界市場が成立していることは事実としてはみとめられている。この点については次のようにのべている。「古

い資本主義的世界市場とならんで、新しい世界市場、すなわち社会主義諸国の世界市場が出現し、急速につよまった。」(同上四二三頁)

(5) 木下悦二「二つの世界市場論」についての若干の疑問」大阪市立大学経済研究所「研究と資料」4一九五八年。

(6) 松井清「二つの世界市場、A理論的諸問題」現代資本主義講座第五卷、東洋経済新報社一九五九年。

二 マルクスのプラン

世界市場についての理論は、マルクスの経済学体系のなかで、完成した、まとまった形ではのべられていない。しかし世界市場はマルクス経済学の世界経済についての理論の中心的な役割をはたすべき概念であったことは疑いない。マルクスが、その経済学の体系的な構想を「経済学批判」の準備のための労作のなかにしていることは周知のとおりである。少からぬ日本のマルクス経済学者はすでにこのプランを研究しており、世界経済の研究もこのプランにはとくに深い関心をもっている。私も私なりにまづマルクスの「経済学批判」のプランを検討することを問題への接近への糸口にしたい。

マルクスは「経済学批判序説」(一八五七年)で次のようにかいている。「経済学の篇別はあきらかにつぎのようになされるべきである。一、一般的、抽象的諸規定、したがってそれらは多かれすくなかれすべての社会形態につうじるが、それは上に説明した意味においてである。二、ブルジョア社会の内部的しくみをなし、かつ基本的諸階級がそれに立脚する諸範疇。資本、賃労働、土地所有。それらの相互の関係。都市と農村。三大社会階級。これら諸階級間の交換。流通。信用(私的)。三、国家の形態でのブルジョア社会の総括。それ自身にたいする

関係において観察されている。「不生産的」諸階級。租税。国債。公的信用。人口。植民地。移住。四、生産の国際的関係。国際的分業。国際的交換。輸出入。為替相場。五、世界市場と恐慌⁽¹⁾。

以上とほぼ同様の構想は「経済学批判」の序文（一八五九年）でものべられている。ここでは次のようにいわれている。「私はブルジョア経済の体制をつぎの順序で、すなわち、資本。土地所有、賃労働、それから国家、外国貿易、世界市場の順序で考察する。はじめの三項目では、私は近代ブルジョア社会がわかれている三大階級の経済的諸条件を研究する。他の三項目の関連はおのずからあきららかである。」⁽³⁾もしマルクスが「資本論」をみずからの手で完成してなお仕事をつづけるほど長寿であったならば、この外国貿易と世界市場についての著作が発表されたことだろう。だがその内容はどんなものだったろう。このことを考える手がかりは、一八五八年に書かれた「経済学批判の準備ノート 第二冊」のなかにあたえられている。そのなかから、われわれの問題に関連した部分を引用しよう。「これら三（項目）のつぎには——いまやその内的全体性において規定された流通としての諸価格の運動。他方では、生産の三つの基本的形態および流通の前提としての、これら三つの階級。その後には——国家、（国家とブルジョア社会）。——租税、または不生産的諸階級の存在。国債。——人口。——外部へとむかう国家、すなわち植民地。外国貿易。為替相場。国際貨幣としての貨幣。——最後に——世界市場。ブルジョア社会が国家の枠をこえてとにでること。恐慌。交換価値に立脚する生産様式および社会制度の崩壊。個人的労働の社会的労働への現実的転化、およびその逆。」⁽³⁾

マルクスは、ブルジョア社会の三つの主要な階級の基礎である資本、賃労働、土地所有をとりあつかったのち、ブルジョア社会の総括の形態である国家の理論を完成し、さらに進んで国家の外部における経済的関係として外

国貿易、国際分業、世界貨幣の理論にすむべきであると考えていた。国家の理論はそれ自体として観察されたブルジョア社会の総括であるが、ブルジョア社会のあいだの関係をあつかうものが外国貿易、国際分業、植民地の理論である。マルクスはさらに世界市場においてはブルジョア社会は国家の枠の外に出たものと考えていた。すなわち世界市場は、国家と国家とのあいだの経済関係にはとどまらず、世界経済という国民経済とは別個の領域を形成するというのがマルクスの考えであつたと判断してもおそらくそれは真実を外したということとはできないだろう。このことは、マルクスが「資本論」で世界貨幣についてのべた次の一節によつても裏書きされている。「金銀が鑄貨としてはまとうが世界市場では再びぬぎすてる相異なる国民的制服においては、商品流通の内的または国民的部面と、その一般的な世界市場部面との間の、分離が現象する。」⁽⁴⁾

世界市場についてのマルクスの考えのなかでとくに注目をひくのは、世界市場において恐慌現象が全面的に展開するという想定である。マルクスは世界市場と恐慌についての理論を自分の手で完成しなかつたし、また私はここで、この点についてのたちいった論議をこころみようとは考えていない。しかし「恐慌。交換価値に立脚する生産様式および社会制度の崩壊。個人的労働の社会的労働への現実的転化」という上記の一節の意味を考えてみることにしたい。私は次のように解釈する。マルクスは世界市場において価値法則にもとづく恐慌現象は完全に展開すると考えていた。恐慌は資本主義的再生産における生産の社会化と取得の私的性格とのあいだの矛盾の爆発であり、したがつて資本主義生産の基本的な矛盾をあらわしている。この基本的な矛盾が資本主義制度の崩壊と社会主義制度への移行をうながすものである。すなわちマルクスによれば、世界市場のカテゴリは資本主義から社会主義への移行の理論の鍵となるもので、世界市場を考えにいれることなしには、移行を

考えることはできない。資本論第三巻でマルクスは、資本主義生産の三つの主要事態についてのべている。三つの主要事態とは、(一)少数者の手における生産手段の集積、(二)社会的労働としての労働そのものの組織、(三)世界市場の成立である。そしてかれは次のようにつけくわえている。「資本制的生産の内部で発展する。人口に比しての老大な生産力は、また、同じ比率ではないが、人口よりも遙かに急速に増大する資本価値（その物質的基礎ばかりでなく）の増大は、増大する富に比しますます狭隘化する基礎——右の老大な生産力が作用するための基礎——と矛盾し、また、右の膨脹する資本の増殖諸関係と矛盾する。だから恐慌が生ずる。⁽⁵⁾」

国内市場とは分離し、これと別個のカテゴリとしての世界市場が成立することおよび世界市場において資本主義の基本的矛盾がもつとも具体的な形をとってあらわれ、したがって世界市場が社会制度の移行の場となること。この二つの点が経済学プランにおける世界市場についてのマルクスの考えの主要なポイントであると私は考える。マルクスはプランを全面的な理論に発展させることなしにおわつた。しかしこの二つの点は、その後のマルクス経済学によつてうけつがれている。マルクスはその理論を資本主義の前独占的段階の条件のもとできづいたが、その後の独占資本主義の段階、さらに第一次世界大戦後の社会主義経済が成立した段階になって、マルクスの理論の正しさは十分に事実によつて証明されている。マルクスの後継者たちは、帝国主義の理論および資本主義の全般的危機の理論において、独占資本主義以後の新しい事実によつて、マルクスの世界市場の理論を發展させている。この場合独占段階と社会主義の成立という新しい事実は、マルクスの理論をおぎなう新しいカテゴリ——と法則の研究を必要とすることはもちろんである。しかしそれとともにマルクス経済学の専門家のあいだに見解のちがいが生じている。私はいまマルクスに立ちかえりながら、新しい事実の發展にそくして、見解のちが

いを検討し、整理することが必要な時がきていると考えるものである。

- (1) Karl Marx, Grundrisse der Kritik der Politischen Ökonomie. Berlin 1953. ss. 28-29. 邦訳マルクス・エンゲルス選集 二八八頁。
- (2) Derselbe, Zur Kritik der Politischen Ökonomie, Stuttgart 1921. s. LIII 邦訳同上二頁。
- (3) 邦訳同上二九三—二九四頁。
- (4) Karl Marx, Das Kapital. Volksausgabe. Erster Band. Moskau. s. 130. 邦訳、長谷部文雄訳青木文庫(1)二五〇頁。
- (5) Das Kapital. Dritter Band. ss. 295-296. 青木文庫(9)三八四頁。

三世市場

マルクスの世界経済についての基本的な考えは上に引用した、少数者の手における生産手段の集積と労働の社会化にともなう世界市場の発展であるということができらるだろう。元来世界市場は、一六一—一七世紀における世界交通と商業の急激な発展によって形成され、資本主義生産の成立の歴史的な基礎をつくったものであるが、資本主義生産が確立するにつれて、世界市場は資本主義生産の発展によって規制される。マルクスは次のように述べている。「世界市場の突然の拡張、流通する商品の倍加、アジアの生産物やアメリカの財宝を支配しようとするヨーロッパ諸国民間の競争、植民制度、——これらのものは、生産の封建制的諸制限の粉砕に本質的に貢献した。……また一六世紀および部分的には一七世紀にも、商業の突然の拡張および新たな世界市場の創造が旧生産様式の衰微と資本制的生産様式の興隆とに圧倒的に影響を及ぼしたとしても、こうしたことは逆に、ちゃんとして出来上った資本制的生産様式の基礎上で生じたのである。世界市場そのものは資本制的生産様式の基礎を形成

する。他面たえずより大規模で生産しようとする資本制的生産様式の内在的必然性は世界市場をたえず拡張しようとするものであり、したがってこの場合には商業が産業をでなく、産業が商業をたえず変革する。⁽¹⁾

資本主義における生産の増大と集積は世界市場を拡張する基本的な力である。市場は一般に商品生産者をむすびつけ、そのあいだに社会的分業を成立させる。それは国内経済でも国際経済でも同じであり、世界貿易は国と国とのあいだの分業、国際分業を成立させる。スターリンがのべたように、「資本主義の発展は、すでに前世紀に生産様式を国際化し、民族的封鎖性を一掃し、諸民族をたがいに経済的に接近させ、広大な諸領域を一つの関連した全体にしだいに統合していくという傾向をあらわした。」⁽²⁾ 世界市場の発展はこのような諸国民の世界経済への統合の過程をしめすものである。資本主義という生産様式は、個々の切りはなされた国民経済ばかりでなく、世界経済というより広い、別個の経済を成立させるものであり、資本主義制度のもとでは世界市場が世界の諸国民をおおい、むすびつける網となるのである。

マルクス経済学は、世界貿易をつうじて国際分業が進展し、国際分業の発展によって世界市場が形成されていくものと考ええる。マルクス・エンゲルスからスターリンにいたるまで、その理論の基礎には共通なものがある。この点でマルクス経済学は古典経済学の国際分業論の伝統をついでいる。古典経済学は、自由貿易制によって国際分業が進展し、諸国民が世界経済へくみいれられるという考え方を発展させた。リカルドの次のような言葉は、その考え方を代表している。「完全な自由交易の制度のもとでは、各国はおのずからその資本と労働とを、自国にもっとも有利なような用途にささげる。この個人的利益の追求は、みごとに全体の全般的利益とむすびつけられる。勤勉を刺戟し、工夫に報い、また自然が賦与した特殊の力をもっとも有効に使用することによって、それ

は労働をもつとも有効に、もつとも経済的に配分すると同時に、一般的生産額を増大させることによつて一般的福利をひろめ、利害と交通との共同紐帯によつて全文明世界を通じて諸国民を一つの普遍的社会にむすびつける。葡萄酒がフランス、ポルトガルで醸造され、穀物がアメリカ、ポーランドで栽培され、また金物その他の財貨がイギリスで製造されるように決定するものは、まさにこの原理である。⁽³⁾」

しかしマルクス経済学と古典経済学の共通性は一面においてである。世界市場における交易と価値法則によつて国際分業が規制され、それによつて世界経済的諸関係が発展するという点にかぎつてマルクス経済学は古典経済学の遺産を継承するが、それ以上にすすむとマルクス経済学は古典経済学と袂をわかす。マルクス経済学が資本主義のもとの国際分業について強調するのは、資本主義生産の発展が世界市場のあり方を規制すること、とくに機械制大工業が後進的農業諸国を国際分業における従属的な地位につなぐことである。この観点は古典経済学の自由貿易制の調和的な世界像にはかけているものである。マルクスは次のようにのべている。「ところが、工場制度がある程度まで普及して一定の成熟度に達するやいなや、ことに、工場制度自身の技術的基礎たる機械そのものが再び機械によつて生産されるや否や、石炭や鉄の生産ならびに金属加工および運輸業が革命され、総じて大工業に照応する一般的生产条件が成立するやいなや、この経営様式は、原料と販売市場との点でのみ制限される弾力性、すなわち突然の飛躍的な拡張能力をえるのである。機械は一面では、たとえば繰綿機が綿花生産を増加させたように、原料の直接的増加を生ぜしめる。他面、機械生産物の低廉と運輸および交通業の变革とは、外国市場を征服するための武器である。外国市場の手工業的生产物を破滅させることにより、機械経営は外国市場を強制的に自己の原料の生産場面に転化させる。かくして東インドは、大ブリテンのために綿花、羊毛、

大麻、黄麻、藍などを生産することをよぎなくされた。大工業国における労働者のたえざる「過剰化」は、促進的な移住および外国の拓殖を助長するのであって、これらの外国は、たとえばオーストラリアが羊毛生産地に転化されたように、母国の原料の生産地に転化されるのである。機械経営の主要所在地に照応する新たな国際分業が生みだされて、地球の一部は、主として工業的な生産場面としての他の一部の、主として農業的な生産場面に転化される。⁽⁴⁾

資本主義のもとでの国際分業が資本と労働とを自国にもつとも有利な用途にささげることがゆるすものではなくて、機械制工業を進展させた大工業国がその資本をもつとも有利な用途にふりむけることが可能なように形成されていく。機械制工業の発展は世界市場の拡大をもとめ、世界市場の拡大は国際的分業の拡大と複雑化を意味するが、国際分業は二つの方向に発展していく。一つは大工業国相互のあいだの分業であり、いま一つは大工業国と食料および原料生産国とのあいだの分業である。機械制大工業のもとでの生産、すなわち産業資本主義の発展は世界市場を拡大させるだけでなく、世界市場における経済的関係を変化させていく。エンゲルスは一九世紀の後半になって世界市場の諸関係に変化の徴候があらわれたことを資本論第二巻のなかの注で次のように指摘している。「以上のことが書かれたとき以来、世界市場での競争が、すべての文明国、ことにアメリカおよびドイツにおける産業の急速な発展によって、著しく増大した。急速かつ巨大に膨脹しつつある近代的生产諸力が資本制的商品交換の諸法則——その内部でこの生産諸力が運動するはずの諸法則——を日々ますます凌駕するという事実、この事実は今日、資本家たち自身の意識にもますます切迫している。このことはとくに二つの徴候をみればわかる。第一は新たな一般的保護関税熱であって、これはことに、他ならぬ輸出能力ある財貨を最もよく保

護するものだという点で旧来の保護関税主義と異なる。第二は、生産したがって価格および利潤を調整するため、大きな生産部面全体の工場主たちのカルテル（トラスト）である。⁽⁵⁾すなわちエンゲルスによれば、生産と資本の集積が一九世紀の七〇年代にはいつてカルテル、トラストを成立させる。これらの独占資本主義の発展したアメリカ、イギリス、ドイツは、食料および原料生産国を本国の予備地域に転化させ、植民地領有国となる。植民地領有国の世界市場での競争ははげしさをくわえ、それぞれ世界市場の分前の増大を目ざして手をうつようになり、その結果カルテル関税を採用する。世界市場における自由競争はおわり、自由貿易制にかわって関税戦の状態が支配するようになる。

- (1) Das Kapital, Dritter Bd. s. 366. 邦訳青木文庫(9)四七三頁。
- (2) スターリン「民族問題とレーニン主義」国民文庫版二二二頁。
- (3) David Ricardo, Principles of Political Economy and Taxation. Edited by E.C.K. Ginner, London 1919, P. 114. 小泉信三訳「経済学および課税の原理」岩波文庫上二三一—二二頁。
- (4) Das Kapital, Erster Bd. ss. 474-475, 青木文庫(3)七二五頁。
- (5) Das Kapital, Zweiter Bd. s. 366. 邦訳青木文庫(9)四七三頁。

四 世界経済体制

二〇世紀の初めになると、植民地領有国による世界分割の完了とともに、世界経済の新しい段階がはじまった。この新しい段階については、J・A・ホブソンの「帝国主義」(一九〇二年)、R・ヒルツァーディングの「金融資本論」(一九一〇年)、V・I・レーニンの「帝国主義」(一九一七年)の三つの有名な著作がある。いうまでもなくこ

のうちもつとも重要な著作はレーニンのそれである。新しい段階は、レーニンにしたがって帝国主義とよばれている。われわれは、レーニンによつて帝国主義とは何かを考えてみよう。レーニンは「もつとも簡単な定義をいえというなら、帝国主義は資本主義の独占的段階だ」といい、さらにこの段階の五つの標識を指摘している。第一は生産と資本の集積によつて独占が経済生活で決定的な役割をえんじること、第二は金融資本、とこれを土台にする金融寡頭制の成立、第三は資本輸出、第四は国際的な資本家の独占団体の成立、第五は世界の領土的分割の完了である。[↑]この五つの標識の内容を一つ一つ検討することはこの稿の仕事ではない。これを要するに第一と第二の標識は、資本主義そのものの内部的变化をさしている。生産と資本の集積がすすみ、生産は社会化されていくのたいていして、社会的生産手段は独占の私有のもとにおかれる。そしてこの独占が経済で決定的な役割をえんじると、銀行資本の集積がすすみ、銀行資本と産業資本は融合して、金融資本という新しい資本の形態が生れ、金融資本を基礎にして、少数の特権者の支配、金融寡頭制が生れる。かくして自由競争制の資本主義が、自由競争と独占の混合物である新しい資本主義へ移行する。それは完全な自由競争制から社会化への過渡をなす社会秩序である。この段階では資本主義は一国の範囲をこえて世界的な体制を形成する。それをしめすものが、三一五の標識である。金融資本の力のたちまざつた国は、商品輸出だけでなく、資本輸出をおこなう。資本輸出はとくに後進諸国にむかつておこなわれ、外国資本の網は後進諸国を世界資本主義のなかにくみいれる。他方でカルテルおよびトラストは国内市場ばかりでなく、世界市場の分割にのり出して、世界の最も強力な独占団体は世界市場の勢力範囲を分割する国際カルテルを結成する。資本輸出と国際カルテルは資本主義にとつて、その製品輸出市場および食料、原料生産の予備地域として国内だけでなく外国を支配することが必要になつたこと

を意味している。一九世紀のなかごろには、世界の強国のなかで植民地をもつていたのはイギリスとフランスだけだった。しかし一九世紀の終りまでには、アメリカ、ドイツ、イタリア、日本が植民地領有国となり、アジア、アフリカの未開墾地域を領有し、あるいは老大国の領土をうばい、世界の領土的分割が完了した。世界には、たがいに競争する一連の植民地領有国が生れた。

レーニンの帝国主義の規定の内容はほぼ以上のようなものである。すなわち帝国主義とは資本主義が世界体制にまで成長した段階であり、また資本主義から社会主義への移行の条件が成熟した段階である。レーニンは帝国主義段階における世界体制の成立について次のようにのべている。「鉄道の建設は、単純な、自然的な、民主主義的な、文化的な、文明的な、企業のようにみえる。それは、資本主義的奴隷制を紛飾することにたいして報酬をもらっているブルジョア教授たちの眼には、また小ブルジョアの俗物どもの眼には、そのようなものとしてうつる。だが実際には数千の網の目によってこれらの企業を生産手段一般にたいする私的所有と結びつけているところの資本の糸は、この建設を（植民地および半植民地の）一〇億の人間にたいする、すなわち従属諸国における地上人口の半分以上と『文明』諸国における資本の賃金奴隷とにたいする、抑圧の道具に転化してしまったのである。

「小経営者の労働にもとづく私的所有、自由競争、民主主義——すべてこれらは資本家とかれらの新聞が労働者と農民をあざむくためにもちいているスローガンであるが——これらすべてのスローガンは遠いむかしのものとなった。資本主義は、地上人口の圧倒的多数にたいする、ひとにぎりの『先進』諸国による植民地的抑圧と金融的絞殺のための、世界体制に転化成長した。」⁽²⁾

レーニンはここで世界体制という言葉についての定義はあたえていない。したがってレーニンがエクスプリシットに世界経済体制というカテゴリーを發展させていたと主張することはいきすぎになるだろう。しかしレーニンの理論を次のように解釈することには十分の理由がある。すなわち帝国主義の段階においては資本主義世界はたんに世界市場によってむすびつけられた各国経済のあつまりではない。もちろん世界経済は、国家の経済行政によって支配される国民経済のような統一性をもっていない。しかし生産力は国民経済の範囲をこえた市場と資源をもとめるまでに發展し、資本は国際的に交錯している。高度に發展した工業は、欧・米・日本の少数国に集中しており、これらの国に集積された資本は、後進地域に輸出されている。この資本輸出は後進地域を大工業国の植民地、勢力範囲に転化する経済的基盤をつくり出す。勢力範囲の拡大をもとめる独占団体は世界市場を分割する国際協定をむすぶようになる。生産と資本の世界的な集積をあらわす国際カルテル、超独占が形成される。一九世紀の終りには、世界の植民地分割は完了し、世界は大工業国を中心とする本国および植民地からなる一連の「経済地域」から構成されるようになった。それはレーニンが「帝国主義」でカルヴァアの資料を引用してしめしているとおりである。⁽³⁾このような世界経済を理解するためには、世界市場というカテゴリーだけでは不十分で、世界経済体制というカテゴリーによらねばならない。なぜならば世界経済は、世界市場をつうずる国民経済のあいだの商品交換関係にとどまらず、さらに發展した構造をもつようになるからである。この世界経済の構造は次のようなものがある。一、商品交換ばかりでなく、資本輸出が国と国とのあいだにおこなわれる。二、大工業国による植民地・勢力範囲の支配が定着し、それを基礎にして生産の發展がおこなわれる。三、資本家団体が世界市場を分割し、世界的な規模で生産と資本の集積がおこなわれる。四、世界の植民地分割が完了し、植

民地を領有する一連の帝国主義国のあいだの競争関係が激化する。

この資本主義世界経済体制を特徴づけるものは発展の不均等性である。発展の不均等性は帝国主義諸国のあいだの対立を激化させ、戦争をひきおこす。資本主義世界体制の成立は、労働と資本とのあいだの対立にくわえて帝国主義相互のあいだの対立という新しい要因をふくむようになる。レーニンは次のようにのべている。「資本主義は、植民地と海外諸国とで、もつとも急速に成長している。これらの国々のなかから、新しい帝国主義諸強国(たとえば日本)があらわれている。全世界の諸帝国主義の闘争は激化しつつある。金融資本が、とくに有利な植民地企業と海外企業からうばいとる貢物は、増大しつつある。この「獲物」の分配にさいしては、きわめて大きな部分が、生産力の発展速度からいってかならずしも第一位をしいない国の手におちている。……そこで、つぎの疑問がおこる。資本主義の基礎のうえでは、一方における生産力の発展および資本の蓄積と、他方における植民地および金融資本の「勢力範囲」の分割、とのあいだの不均衡を除去するのに、戦争以外にどのような手段がありうるだろうか。」⁽⁴⁾

この節とむすびつけて想起されねばならないのは、マルクスの経済学プランである。マルクスは「世界市場。ブルジョア社会が国家の枠をこえてとにでること。恐慌。交換価値に立脚する生産様式および社会制度の崩壊」とかいている。これは世界市場——恐慌——資本主義の崩壊というフォーミュラをマルクスがえがいていたことをもの語っている。レーニンは、その帝国主義論で、世界経済体制——帝国主義戦争——資本主義の崩壊というフォーミュラをこれにつけくわえたものである。この点については次節で移行の問題といっしょにさらに考へることにしたい。ただここでつけくわえておかねばならないのは、資本主義世界経済体制のもとの経済的政

治的統合の問題である。レーニンは「ヨーロッパ合衆国のスローガンについて」という短い論文のなかで、「ヨーロッパ合衆国は資本主義のもとでは、植民地分割協定とおなじである⁽⁵⁾」といい、「帝国主義の経済的条件、すなわち、植民地をもつ『先進的』かつ『文明的』な強国による資本輸出と世界分割という見地からすれば、ヨーロッパ合衆国は、資本主義のもとでは、不可能であるか、あるいは反動的である⁽⁶⁾」と判断する。帝国主義的な性格をもつ資本主義世界体制のもとでは、列強のあいだの一時的協定は可能だが、「世界合衆国（ヨーロッパではなく）は、諸民族の統一と自由との国家形態（われわれが社会主義と結びつけているところの）であり、——共産主義の完全な勝利が、民主主義国家をふくめたいっさいの国家の完全な消滅へとみちびくまでのあいだの、国家形態である。」⁽⁷⁾すなわちレーニンは、超国家的な規模での政治的・経済的統合は社会主義の成立とむすびつけてのみ可能であると考える。それは世界的な規模でおこなわれるときはじめて現実性をもち、諸民族の統一と自由とを保障する国家形態である。生産の社会化は、世界経済体制のなかで、国民の範囲をこえた生産関係を多様化し世界合衆国の成立の条件を成熟させる。だが植民地領有と資本輸出、国際カルテル、植民地領有によって決定されているこの体制の性格は統合共同体の安定した存在をゆるさないのである。このようなレーニンの見解は、資本主義世界経済体制の性質についてのマルクス経済学の基本的な見方を代表するものである。

(1) レーニン「帝国主義」宇高基輔訳岩波文庫一四五一—一四六頁。

(2) 同上、一七一—一八頁。

(3) 同上、一五五頁。

(4) 同上、一五九—一六〇頁。

(5) レーニン「ヨーロッパ合衆国のスローガンについて」レーニン二巻選集第一巻6 社会書房二六頁。

(6) 同上、二四頁。

(7) 同上、二七頁。

五 資本主義の全般的危機

世界経済体制の成立は、資本主義生産に新たな矛盾をつけ加える。すなわち資本対労働という資本主義制度の基本的な矛盾にくわえて、異った国の独占資本と独占資本とのあいだの矛盾と本国の独占資本と植民地の人民とのあいだの矛盾がこれである。後の二つの矛盾は、資本対労働の基本的な矛盾にたいして副次的な矛盾と考えることができる。それは資本主義が帝国主義段階にはいつてはじめてあらわれるものである。この二つの矛盾は副次的なものであるにせよ、資本主義生産の発展を考える場合、とくに資本主義から社会主義への移行を考える場合、これを度外視することはできない。これはマルクス経済学のカテゴリーとして世界経済体制が成立する必然性をしめすものである。なぜならばこの二つの矛盾は世界経済体制の存在を前提にするからである。したがって帝国主義の理論をたんに各国経済情勢の具体的分析につきるとか、世界経済論は国際貿易および金融の諸関係以上に出ないとするわけにはいかない。このような世界経済体制のカテゴリーをマルクス経済学にみちぎいたのは、レーニンである。またこのようなレーニンの理論について示唆にとむ解釈をあたえているのはI・V・スターリンである。

スターリンは「レーニン主義の基礎について」において、レーニンのプロレタリア革命の理論は三つの基本的

命題から出発するのべている。三つの基本的命題とは一、資本主義諸国の内部に革命的危機が激化すること、すなわちプロレタリア戦線で、爆発の諸要素が増大すること、二、植民地諸国に革命的危機が激化すること、すなわち植民地戦線で、帝国主義にたいするいきどおりの諸要素が増大すること、三、資本主義諸国の不均等な発展、破壊された均衡を回復させる唯一の手段である帝国主義戦争、すなわち資本主義諸国のあいだの戦線の激化にみちびき、この戦線が帝国主義をよわめ、さきあげた二つの反帝国主義戦線、すなわち革命的プロレタリア戦線と植民地解放戦線との結合を容易にすること。⁽¹⁾この三つの命題の指摘につづいてスターリンは次のようにのべる。「以前はどれか一国の経済状態の見地から、プロレタリア革命の前提条件の分析がおこなわれるのが普通であった。だが現在では、この態度はすでに不十分である。現在ではすべての国、あるいは大多数の国の経済の状態の見地から、すなわち世界経済の状態の見地から、問題を取りあつかわなければならない。なぜなら、個々の国と個々の国民経済とは、自足的な一単位であることをやめて、世界経済とよばれる一つの鎖の環に転化したからであり、古い「文化的」資本主義は発展して帝国主義となり、しかも帝国主義は、ひとにぎりの「先進」諸国が、地球人口の圧倒的な大多数を金融的に奴隷化し、植民地的に抑圧する、全世界的体系だからである。⁽²⁾」

スターリンは革命の戦略に重点をおいて帝国主義の世界経済体制についてのべているが、これを経済理論の立場からいいかえれば、世界経済体制というカテゴリーは資本主義から社会主義への移行の解明に不可欠の意義をもつものだとすることになる。とくに第一次世界大戦後の時期において、資本主義の変化の解明のために、世界経済体制のカテゴリーが必要になってくる。マルクス主義理論は、第一次世界大戦後の時期に資本主義の全般的危機という規定をあたえている。この規定があらわれたのは、一九二八年のコミンテルン第六回大会で採用され

コミンテルン綱領においてである。綱領は次のように資本主義の全般的危機についてのべている。「世界の新たな分割をめざす最大の資本主義諸国家の帝国主義闘争は、第一次帝国主義世界戦争（一九一四—一八年）をひき起した。この戦争は世界資本主義の全体制をゆり動かし、それによって世界資本主義全体制の全般的危機の時期をみちびき入れた。」⁽³⁾ つづいて綱領は、第一次世界大戦後おこった世界的革命の波についてのべたのち、つぎのようについている。「この国際的な革命過程は、プロレタリアートの独裁のための闘争をも帝国主義にたいする民族解放戦争と植民地反乱をもふくんでおり、この民族解放戦争と植民地反乱はまた何百万、何千万の多数の農民大衆の農業革命と結びついている。こうして巨大な人民大衆は革命の嵐にひきいれた。世界史はその発展の一つの新しい局面にふみこんだ。資本主義体制の一つの長い全般的危機の局面にふみこんだ。この場合世界経済の統一性は革命の国際的性質にあらわれ、世界経済の個々の部分の発展の不均等性は——個々の国々における革命の時を異にする点にあらわれたのである。」⁽⁴⁾

綱領は革命過程という言葉をつかっているが、全般的危機とは第一次世界大戦直後の革命的危機をさしているのではない。「資本主義体制の一つの長い全般的危機の局面」という一句からあきらかなように、資本主義の全般的危機とは、短い激しい革命の過程をさすのではなく、長い一つの移行の時期をさすのである。それでは、資本主義の全般的危機の内容は何か。それは資本主義世界経済体制の全面的危機であり、その危機は、何よりもまず、資本主義がもはや世界経済のすべてを包含する体制ではなくなり、資本主義経済体制とならんで社会主義経済体制が存在するようになったことにあらわれている。コミンテルン綱領草案について、スターリンは次のようにのべている。「この草案は、資本主義諸国の発展の不均等から出発して、個々の国々で社会主義の勝利が可能

であるという結論を下し、二つの平行した重心——世界資本主義の中心と世界社会主義の中心——が形成されるという見通しに到達している。⁽⁵⁾ さらに最近のマルクス経済学の文献は、資本主義の全般的危機について資本主義世界体制の危機がそれであるという規定をあたえている。ソ連の経済学教科書の第三版は次のようにのべている。「資本主義の全般的危機は、資本主義世界体制の全面的な危機であり、戦争と革命を、死滅しつつある資本主義と成長しつつある社会主義との闘争を、特徴としている。資本主義の全般的危機は、経済をも政治をも、資本主義のすべての側面をとらえる。この危機の基礎にあるのは、一方では、資本主義世界体制がますますよわまって、つぎつぎと新しい国がそれから離脱していくことであり、他方では、資本主義から離脱した国ぐにの経済力が成長していくことである。」⁽⁶⁾

すでにのべたように、帝国主義段階において資本主義は、帝国主義対植民地人民および帝国主義相互間の二つの矛盾をふくんだ世界経済体制にまで発展する。社会主義体制の成立によって、資本主義体制はもう全世界的な構造ではなくなり、二つの体制、資本主義と社会主義とが平行して存在するようになる。第三の、二つの体制のあいだの矛盾がうまれる。初めの時期には社会主義体制はソ連一国であり、世界の工業生産および貿易のなかで占めるその比重は小さかった。それは資本主義世界体制のなかの疎外された一部分にすぎないようみえた。しかしソ連の経済発展につれてその存在は無視できなくなった。第二次大戦におけるファシズムの軍事攻勢もソ連を抹殺することはできなかった。第二次大戦の結果は、東欧とアジアに一連の社会主義体制の国々を成立させた。社会主義は世界経済体制を形づくるようになった。世界には二つの世界経済体制、資本主義と社会主義とが平行して存在するようになった。資本主義の全般的危機は第二の新しい段階にはいった。この全般的危機の第二段階

では、社会主義経済体制の世界の生産および貿易において占める比重はかなり早い速度で増大している。やがて社会主義世界経済体制が、その経済力において資本主義世界経済体制と肩をならべ、さらに前者が後者を追いこすことは可能性の範囲のなかにある。こういう事情のもとで、社会主義はもう世界から疎外された経済体制ではない。資本主義は社会主義との貿易、為替信用取引を拒否できなくなりつつある。資本主義世界経済体制は、貿易・金融取引をつうじての社会主義世界経済体制の影響を長くこばみつづけることはできないだろう。

他方で第二次大戦の結果、資本主義世界経済体制には一つの重要な変化がおこった。それは、この戦争が帝国主義の体制をゆりうごかし、民族独立運動の高揚をひきおこし、その結果、戦後まずアジアの植民地が本国から独立を獲得し、ついで植民地の独立は、中東・アフリカにおよび、中南米にもひろがるうとしていく。植民地の独立の波は全世界をおおい、帝国主義の植民地体制の危機はふかまっている。植民地諸国のあるものは人民の革命的行動によって、民族的解放と社会的解放を実現し、社会主義体制にむかって進んでいる。これらの国では植民地主義は政治的にも、経済的にも一掃されている。しかしアジア・アフリカの多くの国は政治的には独立を獲得したが、帝国主義諸国の経済的な支配は残存しており、なお欧米の資本主義諸国から資本輸出の新しい流れがこれらの「後進諸国」にむかってうごいている。そのうえに政治的独立を獲得したアジア・アフリカ諸国は深刻な経済的困難をかかえており、社会経済的にはこれらの国々の地位はまだ流動的である。しかし見落せないのは、これらの国々が工業化と経済の近代化によって経済の自立を達成する計画に着手しており、また社会主義体制諸国から技術的・経済的援助があたえられ、したがってアジア・アフリカの諸国には、欧米の帝国主義諸国からの経済的独立と工業化の目的にたつする新しい可能性がひらけていることである。社会主義世界体制とアジア・ア

フリカの「後進諸国」とのあいだの経済的關係は親密をくわえていく傾向がある。このような状態と発展傾向とは、第二次大戦前にはなかったものであり、世界経済体制の主要な変化を意味するものである。

資本主義世界体制の中心である欧米の帝国主義諸国にも変化がおこっている。欧米の主要国は、戦後の世界経済の諸条件の悪化にもかかわらず、戦後の生産の回復、その後の生産の拡大にかなりの成功をしましめている。ことに一九三〇年代の世界恐慌のもとで生産と貿易の停滞になやんだ時期にくらべて、戦後の生産と貿易の増加率ははるかに高いものがある。現在までのところ第一次大戦後の全般的危機の第一段階の特徴であった企業の慢性的な遊休状態と慢性的な大量失業は主要資本主義国に全面的にあらわれていない。しかし他方で生産と貿易の拡大が資本主義諸国の国内経済構造の大きな変化をともなっていることを見落せない。一言でいえば、それは独占の高度化と国家と独占のむすびつき、すなわち国家独占資本主義の傾向がいちじるしく強くなったことである。このような構造のもとでの生産の増加は、国内市場における価格のメカニズム、すなわち価値法則の現象形態をかえ、価格のたえざる騰貴をもたらし、安定的な発展が破壊される潜在的な危険がつけねに増大している。この意味で、戦後の資本主義にとって市場問題は未解決の問題である。他方で資本主義世界体制の不均等な発展は激化している。経済統合が戦前よりはるかに進んだ形で具体化しているが、それは世界的な規模ではかえって帝国主義間の対立を増大させている。世界市場の分前をめぐる帝国主義間の対立はますますはげしくなっている。

以上は第二次大戦後の資本主義の全般的危機の第二段階のきわめて簡単な特徴づけである。この簡単な特徴づけからあきらかなことは、資本主義の全般的危機の諸現象がますます世界経済の場をつうじて具体化していることである。社会主義世界体制の発展、帝国主義の植民地体制の崩壊、独立を獲得した後進諸国の経済発展をつう

ずる社会主義世界体制への傾斜、これにたいする資本主義世界体制の適応とその経済構造の変化、このような事実は、世界経済の規模において、資本主義から社会主義への移行が現実に行進しつつあり、また移行の条件が成熟しつつあることをしめしている。全般的危機の第二段階では、移行の具体的な形態も変化することが考えられる。マルクスが産業資本主義の条件のもとで提示した資本主義世界市場——恐慌——資本主義の崩壊、レーニンが帝国主義の条件のもとでしめした資本主義世界経済体制——戦争——資本主義の崩壊という二つのフォーミュラにたいして、二つの世界経済体制——体制間の経済競争——平和的移行というフォーミュラを考える可能性さえうまれていた。ただこの三つのフォーミュラは、それぞれ一つが他におきかわるものではなく、むしろ最初の基本的なフォーミュラにたいして、新しい条件のもとで新しいフォーミュラがつけ加わるものであつて、全般的危機の第二段階では、これらの三つのフォーミュラを成立させる諸々のカテゴリーを総合して、発展法則の規則性をつかむことがマルクス経済学の課題になる。

これ以上移行の具体的な新しい形態を考えることはこの稿の目的ではない。マルクス経済学は、戦後の全般的危機の第二段階の経済についてあきらかにしなければならぬ多くの具体的な問題をもっている。これらの課題をはたして、世界経済と国内経済の新しい状態を全面的に解明したのち、経済科学は移行というきわめて巨視的な問題にすすむことができる。またこういう課題をはたす場合、いくつかの基本的なカテゴリーの整理が前提になる。新しい経済現象の解明には新しいカテゴリーの規定が必要になる。いままでのべてきたようにマルクス経済学は、世界経済の現象と発展を理解するために世界市場と世界経済体制というカテゴリーを設定している。それはマルクスからレーニンまで、さらにスターリンまでのマルクス主義の世界経済理論の発展のなかから生れた

遺産であり、われわれはこれを新しい戦後の世界経済の研究のために継承して使用することができる。しかし戦後の全般的危機についての理論の展開のなかで、私の見解では、世界市場と世界経済体制のカテゴリの混同や誤った規定への傾向があらわれている。この誤りをただして、二つのカテゴリを正しく規定しなおすことが当面の必要になっている。この誤りはとくにスターリンの「単一世界市場の崩壊」の理論に根ざしている。したがってまずこのスターリンの理論を再検討することが適当だろう。

- (1) スターリン「レーニン主義の基礎について」邦訳スターリン全集第六卷一〇八一—一〇九頁。
- (2) 同上、一一〇頁。
- (3) Programm der Kommunistischen Internationale. Berlin-Hamburg, 1928, s. 18.
- (4) do. s. 19.
- (5) スターリン「ソ同盟共産党中央委員会七月総会の総結果」邦訳スターリン全集第十一卷二二七頁。

六 単一世界市場の崩壊について

「単一世界市場の崩壊」の理論については、「まえがき」でもふれたが、スターリンの見解をまず引用しよう。スターリンは次のようにいっている。「第二次世界戦争とその経済的諸結果とのもつとも重要な経済的帰結と考えなければならぬものは、全体を包括する単一の世界市場の崩壊である。この事情は、世界資本主義体制の全般的危機をいっそうふかめることになった。第二次世界戦争そのものが、この危機によってうみだされたのであった。戦争中むんずとくみあった二つの資本主義連合はいずれも、相手をうちやぶって世界支配をかちとろうともくろんでいた。ここに彼らは、危機からの活路をもとめたのであった。……しかし、戦争はこういう期待にそ

わなかつた。……資本主義体制から中国とヨーロッパの人民民主主義諸国が離脱して、資本主義陣営に対立する単一の強力な社会主義陣営を、ソヴェト同盟といっしょに形成した。対立しあう二つの陣営が存在することの経済的帰結となつたものは、全体を包括する単一の世界市場が崩壊して、その結果、われわれは、いま、同じくたがいに対立している平行的な二つの世界市場をもっているといふことである。⁽¹⁾

「しかし、以上のことからして主要な資本主義諸国（アメリカ、イギリス、フランス）が世界資源にたいして力をくわえうる範囲は、拡大するどころか縮小することになり、これら諸国にとつての世界の販売市場の諸条件は悪化し、またこれらの諸国における諸企業の操短は増大するといふことになる。⁽²⁾ 世界市場の崩壊にともなう世界資本主義体制の全般的危機の深化といふことは、じつに、ここにあるのである。」

スターリンの理論の正しい点とまちがっている点について、ソ連の経済学教科書の第三版は次のようにのべている。「イ・ヴェ・スターリンは、マルクス・レーニン主義の古典的著者たちの著作に依拠して、帝国主義と資本主義の全般的危機との諸問題にいくたの新しい命題をしあげた。かれは一国における社会主義の勝利の問題についてのトロツキー主義的な、また右翼日和見主義的な方法に批判をあげた。スターリンは、資本主義の全般的危機や、また二つの体制への世界の分裂、資本主義の植民地体制の危機、企業の慢性的遊休状態、恒常的な大量失業というようなその特徴を、くわしく分析した。かれは資本主義の全般的危機の二つの段階の問題をときあかした。スターリンの著作のなかでは、ファシズムの反動的で、侵略的な本質が暴露されている。

「しかしスターリンの著作には資本主義経済の諸問題についてのまちがった命題がある。たとえば、第二次世界大戦後には主要な資本主義諸国（アメリカ合衆国、イギリス、フランス）で生産高が縮小することはさげられ

ないという、現実に合致しない主張、現代資本主義の生産力は「停滞」している——資本主義の腐敗ということ
はけつしてあらゆる技術的進歩がとまることを意味しないのに——という命題、資本主義の全般的危機がふかま
ったことの主要な特徴は社会主義世界体制の形成ということであったのに、第二次世界大戦後の資本主義の全般
的危機の深化のもっとも重要な指標は単一の世界市場の崩壊であるとする主張がそれである。⁽³⁾

これによって、われわれはソ連でスターリンの理論のどの点が批判されているかを知ることができるが、しか
し単一世界市場の崩壊の理論の内容的な批判は手がかりがあたりだされているだけである。私はこの問題について
の自分の意見をのべてみたい。しかしこの点については、グンター・コーマイがかなり詳細に意見をのべている。
コールマイは、その名著「民主主義的世界市場」一九五六年で、スターリンの理論によって、二つの世界市場論
をのべているが、新しい著書「社会主義世界経済体制の発展の諸問題」一九五八年（両書はすでに二頁に引用した）
では、旧著とスターリンの理論を批判している。まづコールマイの見解をうかがうことにしよう。

コールマイは単一世界市場の崩壊の理論のあやまりを三つの点で指摘している。第一の点というのは次のとお
りである。「欧州およびアジアの諸国における社会主義革命の勝利とともに、『第二次世界戦争とその経済的諸
結果とのもっとも重要な経済的帰結』として成立したのは、新しい世界市場だけでなく、まづ第一に世界市場を
包含する社会主義世界経済体制であった。世界経済と世界経済体制とは、世界市場と世界市場体制とにくらべて、
より高い、より包括的な、複雑な概念である。社会主義世界経済体制は、社会主義生産様式の国際的に組織され
た体制であり、それは流通部面——すなわち市場——ばかりでなく、生産部面もふくんでおり、生産部面の方が
主要でさえある。⁽⁴⁾」第二の点は、社会主義世界経済体制および世界市場体制の成立は、第二次世界戦争とその経

済的、結果の帰結だけではない。その形成は何よりもまづ革命的政治行動、すなわち欧州およびアジアにおける人民革命の勝利の結果をあらわすものである、ということである。第三の点は次のとおりである。「上記の規定は、第二次世界戦争の終末とともに単一の、全体を包括する世界市場が崩壊したといっている。これは二つの理由から正確ではないとおもう。もしこの規定が資本主義世界市場体制の崩壊という意味ならば、事実上こういう歴史的過程がおこっているにしても、われわれがすでにしめそうとしたとおり、それはすでに十月革命が勝利し資本主義世界市場体制から大きな市場地域が脱落したときにはじまったのであった。もし実際にこの規定を世界市場が崩壊したという意味にとらねばならないならば、それにはわれわれは反対である。」⁽⁵⁾

すなわちコールマイの意見は次のとおりである。単一世界市場の崩壊という全般的危機の第二段階の規定は、社会主義世界経済体制の成立という、より重要な事実を無視している。また世界市場の崩壊ということが資本主義世界市場の崩壊の意味ならば、それは一九一七年におこっており、第二次大戦後におこったのではない。また資本主義世界市場ではなくて、世界市場そのものが崩壊したという意味だとしても、それもまた誤りである。最後の論点についてのコールマイの主張は次のとおりである。今日の世界では二つの主要な型の市場体制がある。それは、社会主義世界市場体制と資本主義世界市場体制とである。世界市場における交換関係は三つのカテゴリーにわかれる。第一は資本主義世界経済体制内部における国際的交換関係、第二は社会主義世界経済体制内部における国際的交換関係、第三は二つの世界経済体制のあいだの国際的交換関係である。世界市場とは、これらの国際的交換関係の全体である。商品経済のカテゴリーの立場からすれば、世界市場は、二つの世界市場体制および両市場体制の間におこなわれる交換の統一である。「すなわち、世界市場は、商品経済のカテゴリーに属

するが、この商品経済のカテゴリーだけから出発するとき、外部的な市場形態のみをみて、そのときどきの社会経済的形態をみないとき、われわれは世界市場について語る十分の理由がある。世界市場は、今日さまざまな国内市場およびその相互の關係の総体制であつて、その概念からして、全体を包括するものではあるが、単一ではない⁽⁶⁾。「コルマイはこのように世界市場の性格規定をおかない。その理由から「単一世界市場の崩壊、平行する二つ世界市場の成立」というテーゼは誤りだと結論する。二つの平行する世界市場というのは一面的な見方である。なぜならば二つの世界市場体制のあいだには第三の世界市場關係があるからであり、またそれゆゑに世界市場が崩壊したというわけにはいかない⁽⁷⁾。

コルマイのように世界市場についての概念規定をはつきりうち出そうとしているマルクス経済学者はあまり多くない。この点でコルマイのころみは評価しなければならぬ。だが私にはコルマイの見解には賛成しがたいものがある。まづ第一の点は、コルマイは、「世界市場という言葉によつて、われわれは諸々の国内市場と國際的貨幣——商品諸關係の總体の体制を理解しなければならぬ⁽⁸⁾」といつてゐる。具体的にいへば、現在資本主義世界市場体制と社会主義世界市場体制とがあり、この両市場体制と体制間の交換關係があり、この三つの總体が世界市場である。こういう世界市場の規定にたいしては、二つの点で疑問をもたぬわけにはいかない。第一には、世界市場とは国内市場をふくむものだろうか。第二には、世界市場がその社会経済基礎によつて区別できるというのは正しいだろうか。この疑問に答える手がかりをマルクスにもとめよう。

マルクスが世界市場は商品経済のカテゴリーにぞくするものであることをつねに指摘していることは周知のとおりである。次の一節は世界市場のこのような性格の規定を明白にしめしている。「産業資本が貨幣または商品

として機能する流通過程の内部では貨幣資本としてであれ、商品としてであれ、産業資本の循環はいいことなる社会的生産様式——これが同時に商品生産たるかぎりでは——の商品流通と交錯する。商品が奴隷制に基づく生産の生産物であるか、農民（中国、インドのライオット）の生産物であるか、……または半未開の狩猟民族などの生産物であるかを問わず、それらは商品および貨幣として、産業資本がもって自らを表示するところの貨幣および商品に対応して、産業資本の循環にも入りこめば、商品資本によって担われる剰余価値——これが収入として支出されるかぎり——の循環にも入りこむ。つまり商品資本の両流通部門に入りこむ。それらが出てくる生産過程の性格はどうでもよい。商品としてそれらは市場で機能し、商品としてそれらは産業資本の循環ならびにそれによって担われる剰余価値の流通に入りこむ。かくて産業資本の流通過程を特色づけるものは、諸商品の由来の全面的性格であり、世界市場としての市場の定在である。外来の諸商品についていえることは外来の貨幣についてもいえる。商品資本が外来貨幣にたいし商品としてのみ機能するのと同様に外来貨幣は商品資本にたいして貨幣としてのみ機能する。貨幣はここでは世界貨幣として機能する^(g)。すなわち、マルクスによれば、世界市場を成立させるものは、産業資本の流通過程であるが、世界市場は商品経済のカテゴリーとして機能するのであり、世界市場にいきこむ商品の由来がどのような生産様式であるかは問われない。社会主義生産の流通過程においても世界市場が成立するが、この世界市場もやはり商品経済のカテゴリーとして機能するものと考えてよい。資本主義が世界市場をつうじて、後れた生産様式の地域経済の資本主義への発展を促進したように、社会主義もまたその経済の発展につれて、世界市場をつうじて資本主義の社会主義への移行を促進するだろうと予想される。さうだとすれば、世界市場を、資本主義と社会主義の二つの型態にわけるのは、世界市場の特殊的、具体的分析の

作業であり、その制度的、政策的な特殊性をあきらかにすることはできないが、全般的危機の第二段階における世界市場の一般的、理論的な解明はそれごとたりとするわけにはいかない。私は二つの世界経済体制の成立という条件のもとでも世界市場の単一性、統一性は理論的にはみとめられねばならないと考える。この点については次節でべることにする。

コールマイの世界市場についての規定にたいする第二の疑問は、世界市場は各国の国内市場をふくむものかという点である。これはたんにコールマイひとりの意見ではなく、多くのマルクス経済学者によって主張されている。ソ連の大百科辞典、東ドイツのヘルムート・ブレッシング等はコールマイと同じような規定を世界市場にあたえている。⁽¹⁰⁾なるほど世界市場という領域を、各国の国内市場のほかに見出すことはできない。一つの国にとって、自国の国内市場以外はすべて世界市場である。また国際価格の成立する市場、たとえば穀物の場合のシカゴ市場、証券の場合のニューヨーク、ロンドン市場はそれぞれの国の国内市場から区別することはできない。このように地域的に世界市場をとり出して国内市場と区別することはできない。しかしそれにもかかわらず私は世界市場は国内市場をふくむものではないと考える。すでに第二節で引用したように、マルクスは「商品流通の内的または国民的部面と、その一般的な世界市場部面とのあいだの分離」についてのべている。商品流通の国民的部面と世界市場的部面とはその運動の様式がちがいで、市場における価値実現の様式がちがっている。市場とは、商品の社会的価値、すなわち市場価値が成立し、商品の生産者がそこに商品をもち出し、その商品の個別的な価値を社会的な水準において実現する場である。資本主義も社会主義も、それが商品生産の性質をもつかぎり、市場の存在を前提とする。マルクスは、市場における商品の価値の実現が支配能力ある慾望によって規制されること

を次のようにのべている。「一商品が市場価値で——すなわちその商品にふくまれる社会的必要労働に比例して——販売されるためには、この商品種類の総量に費される社会的労働の総量がこの商品にたいする社会的慾望すなわち支配能力ある社会的慾望の量に照応しなければならぬ。競争は、市場価格の動揺は——これは需要供給の比率の動揺に照応する——たえず、各商品種類に費される労働の総量を右の程度に減少させようとする。」⁽¹¹⁾世界市場と国内市場とを別個のカテゴリーとして区別しなければならぬ理由は、世界市場の場合、この社会的慾望の基礎をつくる支払手段が金と外貨の保有によって制限されていることにある。世界市場における支払手段の流通は二国間の相互運動の形をとり、国内流通におけるように商品の形態変化の無限の連鎖を媒介するものではない。⁽¹²⁾また金・外貨の保有は、その国の貿易の範囲を左右する。したがって世界市場における商品流通は金・外貨の獲得、また金・外貨の防衛という条件をはなれることはできない。このことから考えても、世界市場が国内市場の総体制だというコールマイの解釈は支持しがたい。コールマイは、こういう難点をさけるために両市場体制のほかに、国際的な貨幣・商品関係なるものをくわえて、その総体を世界市場とよぼうとする。しかしそれによって世界市場のカテゴリーには体制と関係という二つの概念が雑炊的にもりこまれ、世界市場の本来の性格があいまいにされ、ことにマルクスによって解明された一般的、理論的な側面が見落されてしまう結果になっている。

- (1) スターリン「ソ同盟における社会主義の経済的諸問題」国民文庫三八—三九頁。
- (2) 同上、四〇頁。
- (3) 経済学教科書改訂第三版上掲五一七—五二八頁。
- (4) Gunther Kohney, *Entwicklungsprobleme des sozialistischen Weltwirtschaftssystems*, 1958, s. 28.
- (5) *do. ss.* 28—29.

- (6) do. s. 30.
- (7) do. ss. 30-31.
- (8) do. s. 25.
- (9) Karl Marx, Das Kapital. Zweiter Bd. s. 105. 邦訳青木文庫(5) 一四四頁。
- (10) ホールマイヤは Entwicklungsprobleme. s. 25. 于一九五四年版ソヴェト大百科辞典第二七卷五六頁を引用して自説を裏づけてゐる。またブレンシングの説は、内田穰吉編「最大限利潤の法則」一九五五年大月書店のなかの、ヘルムート・ブレンシング「資本主義世界市場の理論の若干の問題」を参照。
- (11) Das Kapital. Dritter Bd. s. 219. 邦訳青木文庫(9)二八七頁。
- (12) この点については木下悦二「二つの世界市場論」についての若干の疑問「大阪市立大学経済研究所「研究と資料」(4) 四八—五〇頁参照。

七 世界市場と世界経済体制との矛盾

コールマイは世界市場を両市場体制と体制間の交換関係の総体として成立するものと考へている。しかし私は、一般的、理論的カテゴリーとしての世界市場は総体 Gesamtheit ではなくて、単一体 Einheit として成立するものであることを主張する。もしそうでなければ、世界市場の研究は、世界経済の歴史的現実過程の分析か、経済地理的研究の域を出るものではないだろう。われわれは世界市場を一つの理論的なカテゴリーとして考へる。マルクス・エンゲルスの理論が、世界市場を、たんに歴史的具体的な条件として考へるだけでなく、資本主義から社会主義への移行の運動法則を成立させるカテゴリーとして考へていることは上にのべたとおりである。スターリンの二つの市場の成立についてのテーゼは、単一世界市場というものがなくなつて、異つた法則の作用する二つの市場が生まれ、この二つの市場をつうじて、社会主義の発展は促進され、資本主義の崩壊がいよいよはげ

しさを加えるという考えであり、それゆえに資本主義の全般的危機はいつそう深くなったことになる。このテーゼのあやまりはすでに指摘されているとおりだが、思考の論理はコンセメントにつらぬかれている。ヨーロッパの場合には社会経済的にちがった形態の二つの市場がうまれながら、総体としての世界市場が考えられるというのは論理的に一貫性を欠いており、世界市場のカテゴリーと全般的危機とをむすびつけて、コンセメントに理論をくみ立てようとしているのかどうかを疑わせる。私は世界市場の属性は、単一性であると考える。現実の世界経済はたしかにことなつた世界貨幣をもつ、ことなつた世界市場の存在をしめしている。しかし世界市場の単一性は、統一への傾向としてあらわれている。第一次大戦後の相対的安定期における金本位制の復活、第二次大戦後の通貨の交換性の回復と経済の自由化、さらにそれより重大なことだが、東西貿易の拡大の傾向はこのことを物語っている。世界市場の現実過程は、統一への傾向と分裂への傾向の錯綜をしめしているのである。この分裂と統一の傾向の鉤綜にこそ全般的危機の深まりがあらわれているのである。

第二次大戦後は社会主義世界経済体制の成立とともに、両体制のなかに、通貨、価格体系、貿易制度を異にする二つの世界市場が成立している。これはたしかに資本主義の全般的危機の深まりをしめす事態である。しかしわれわれは、二つの世界市場の存在そのものが全般的危機の第二段階の基本的な標識であるとは考えない。全般的危機の第二段階をもたらししたのは、二つの世界経済体制の成立であり、二つの世界市場の成立はそれに随伴する標識である。この場合、二つの世界市場を成立させたものは、二つの世界経済体制の成立自体ではなく、むしろ資本主義世界経済体制と世界市場とのあいだの矛盾である。一般的にいえば、帝国主義の段階以来、資本主義世界経済体制と世界市場とのあいだの矛盾は高まりつつあり、そのために世界市場の分裂はしばしばおこっている。

る。この意味で、世界市場の分裂は、第二次大戦後の新しい現象ではなく、またソ連の十月革命以後の現象でもなく、一九世紀末、二〇世紀の初めにさかのぼるものである。スターリンは「権力獲得前の党と獲得後における党」という一九二一年に書かれた論文で「経済的な見地からみれば、今日の資本家的グループ自体のあいだの紛争と軍事的な衝突とは、プロレタリアートと資本家階級との闘争と同じように、現代の生産力と、その発展の国民的帝国主義的なわくとの矛盾を、その基礎にしている。つまり帝国主義的なわくと資本主義的な形態とは、生産力をおさえつけ、それを発展させないのである」とのべている。帝国主義段階では、帝国主義的な枠が世界市場に分裂の傾向をもたらす。この意味でスターリンの指摘はうなづけるものがある。しかし私はこの矛盾を資本主義世界経済体制と世界市場とのあいだの矛盾として理解すべきであると考え。すなわち国内では独占価格の体系が成立して、世界市場価格とのあいだに隔差が存在する。他方で世界貨幣たる金は少数の国に集中し、流通手段の偏在、世界通貨の不足が支配する。国内経済の均衡と世界市場の均衡のあいだの矛盾がおこる。

資本主義的再生産は、この市場の矛盾に衝突しながら世界経済体制を進展させていく。こうして世界経済体制は世界市場の統一とあいれないものになり、世界市場の分裂の傾向をつくり出す。産業資本主義の発展が自由貿易制を実現したことは周知のとおりである。この自由貿易制による世界市場の統一性の実現は、世界市場の単一性を表現するものであった。しかし一八七〇年ごろを境に、自由競争制は独占制にうつり、カルテル関税があらわれはじめた。このことは上に引用したように、エンゲルスが指摘している。カルテル関税は古い保護関税のように国内市場防衛の手段ではなくて、外国市場攻撃の手段である。十分に競争力をもった独占企業に国内価格のつり上げによるプレミアムをあたえて、輸出競争力をあたえる。外国市場における価格競争をたたかう余力を

あたえる。しかしカルテル関税によって世界市場は全体として拡大をさまたげられる。元来自由貿易制によって世界市場が拡大すれば、それだけ国際分業はひろがり、それぞれの国の生産は最も条件の有利な産業部門に専門化し、それによって価格を引下げ、それだけさらに世界市場を拡大することができる。他方で大きな市場の存在は、それだけ大量生産を可能にし、それによって労働生産性を高め、価格を引下げることが可能にする。自由な世界市場の拡大は、国際分業と大量生産の利益を保証するものである。カルテル関税制が自由貿易制にとつてかわると、世界市場の拡大ははばまれ、国際分業の発展は制約される。しかし独占は、国内価格のつり上げによって、独占利潤を取得する。資本蓄積は加速化し、生産能力は増大する。独占はますます大きな市場を要求する。カルテル関税制は両刃の剣である。この矛盾からの脱出策をあたえるものが、資本輸出による植民地市場の獲得である。世界市場は高度に発展した資本主義諸国の植民地および勢力範囲に分割される。世界の植民地分割が完了すると、独占資本は他の国の独占資本の勢力範囲の奮取によって市場を拡大しようとする。帝国主義国のあいだで勢力範囲の攻撃と防衛がはげしくなる。貿易制限の慣行は世界市場を障壁によって分断する。帝国主義段階にはいると、世界経済体制と世界市場は、こうしてたえず矛盾し、衝突する。世界市場の統一性はやぶれる。すなわち世界市場の単一性の喪失はこの矛盾に根ざしている。もっともこの意味における世界市場の分裂を世界市場の単一性の喪失という、二つの世界経済体制の成立による世界市場の単一性の喪失とは別の現象だという異論が出るかもしれない。しかしよく考えてみると、第二次大戦後における「二つの世界市場」の成立も、資本主義世界経済体制と世界市場との矛盾によるものであることがあきらかになる。

われわれは第二次世界大戦前と大戦後とのちがいを考慮して、大戦前における世界市場の分裂を世界市場の区

画化とよぼう。帝國主義段階では、世界市場の区画化の傾向ははげしさをくわえている。他方で資本主義生産の發展は世界市場の拡大と統一を要求する。したがって世界市場はあるときは統一を回復し、あるときは分裂し区画化するという過程をくりかえしてきた。世界市場の区画化がもつともはつきりあらわれたのは、一九三〇年の世界恐慌のあとであった。第一次大戦によって停止されていた金本位制が復活されたから世界市場は統一を回復した。戦後資本主義の安定、生産の増大によって世界市場の拡大が要求されたからである。しかし一九二九—三二年の世界恐慌とともに、金本位制が放棄され、主要資本主義諸国はその勢力範囲の攻撃と防衛に没頭するようになった。イギリスは帝國特惠関税制を採用し、アメリカはドルの意識的な引下げの方針をとって、経済的孤立主義に転じ、ドイツは欧州新秩序、日本は東亜共栄圏の標語をかかげて、公然たる拡張主義と軍国主義の政策をとった。⁽²⁾世界経済はブロックにわかれ、世界市場は区画化された。このように、一九三〇年代には、資本主義世界経済体制と世界市場とのあいだの矛盾はもつともはげしい形をとつたのであった。

第一次大戦後の世界市場の分裂がソ連の社会主義経済体制の成立によるという考えはコールマイをはじめ若干の経済学者によって支持されている。この考えについてもここに検討してみることが必要だろう。ソ連の社会主義経済体制の成立によって、資本主義経済体制が全世界的な体制ではなくなったことは事実である。しかしそのことと世界市場の分裂とは区別すべき二つのことである。ソ連の貿易は国家の手によっておこなわれ、その国内価格、通貨は資本主義諸国とはことなつた制度のもとにおかれている。しかし国際貿易のためには、ソ連は世界市場に参加したのであった。レーニンは一九二二年のジェノア会議を前にして「われわれがジェノアにゆくのは、もちろん、共産主義者としてではなくて、商人としてであり、われわれは商売をしなければならぬが、かれら

も商売をしなければならぬ。われわれは自分の利益になるように商売したいが、かれらも自分の利益になることを望んでいる」とのべた。⁽³⁾ またジュノア会議の席上でロシア代表チチェリンは「ロシア代表団は、共産主義の原則の立場をすてることなしに次のことを承認する。古い社会秩序と生成しつつある新しい社会秩序との共存を可能にしている現在の歴史的時期において、この二つの所有制度を代表する諸国家間の経済協力は全般的復興にとって絶対的に必要であることがこれである」とよびかけた。この二つの発言は、ソ連の社会主義体制が世界市場への参加と両立できぬとはソ連の指導者たちが考えていなかったことを物語っている。⁽⁴⁾ 両大戦のあいだの時期においてソ連が資本主義世界にたいして十分の市場を提供しなかったことの主要な理由は、資本主義世界の側の貿易および国際金融制度にある。すなわちソ連がその社会主義建設を資本主義の影響によって攪乱されるのをふせぐためにとる制限的措置の承認とソ連の支払い問題の解決を援助するための信用の供与とが必要であったのであるが、資本主義諸国の側がこの二つの点を保障する用意を示さなかったことがそれである。

第二次大戦後社会主義世界経済体制が成立した。この世界体制の国々は同じ経済体制をもち、たがいにもその社会主義体制を強めるように協力することができ、その間の経済関係によって攪乱的な影響をおよぼす危険はない。そればかりでなく、経済的技術的援助の供与において、さらに生産計画の直接の相互調整において、資本主義世界経済体制には存在しない経済協力の可能性をもっている。したがって社会主義世界経済体制のあいだに、密接な貿易関係が発展するのは当然である。しかしそのことはただちに世界市場の分裂という事態をもたらすものではない。現状において、通貨・支払制度・価格制度を異にする東西二つの世界市場グループが存在していることは事実である。だがこの事態をつくり出した理由は、二つの世界経済体制の成立そのものではない。その理由は

第一に資本主義世界の側の対共産圏禁輸政策にある。第二に戦後ブレトンウッズ機構、ガットなどの国際金融、国際貿易の機構が生れたのにもかかわらず、これらの国際機構が二つの世界経済体制をふくみ、橋渡しする本当の意味における全世界的な制度の役割りをはたしていないことにある。これをさらにその根本にさかのぼっていえば、資本主義世界経済体制がいぜんとして一連の高度に発展した資本主義国とその勢力範囲のグループから成り立っており、これらの勢力範囲を拡大しようとする衝動が世界市場の統一の実現をさまたげているからである。国家独占資本主義体制は、一国の範囲では、全般的危機の第二段階における世界経済体制の変化に資本主義のメカニズムと政策を順応させている。しかし国際経済政策の面では資本主義の順応はきわめて不十分である。それは社会主義体制との関係についてだけではない。後進国にたいする経済関係において、また高度に発達した資本主義国相互のあいだの金融・関税の諸関係の調整においても、勢力範囲をめぐる帝国主義の矛盾と対立は解消されていない。これを緩和する抜本的な政策もとられていない。欧州共同市場の結成と自由化の経緯はこのことをしめしている。すなわち資本主義世界経済体制と世界市場とのあいだの矛盾はいぜんとして強いものがある。「二つの世界市場」を固定化し、対立にさえみちびきつつあるのは、二つの世界経済体制の成立そのものではなく、この矛盾なのである。

(1) スターリン全集上掲第五巻一一八頁。

(2) 一九三〇年代の世界市場の区画化の事情については、小椋広勝「戦後の世界経済」第六章「世界市場の分裂」一〇八一—二九頁参照。

(3) レーニン「ロシア共産党（ボ）第十一次大会政治報告」邦訳レーニン全集第三三巻二六六頁。

(4) Geschichte der Diplomatie. Dritter Band / Teil I. Herausgegeben von W. P. Potjomkin. Berlin 1948. ss. 205-206.